

第 1 回
第 4 次武蔵野市民地域福祉活動計画推進委員会
会 議 要 録

令和 3 年 2 月 25 日（木）

社会福祉法人 武蔵野市民社会福祉協議会

日 時 令和3年2月25日(木) 午前10時から午後0時5分
会 場 市庁舎 西棟4階 412会議室
出席委員 宇田川みち子、大屋朋代、熊田博喜、小久保渉、田中邦忠、千種豊、深田榮一、矢島和美
事務局 秋山常務理事、田村事務局長、高橋事務局次長、横山担当係長、三藤主任

(午前10時 開会)

1 開会

- 事務局次長から資料確認を行った。
- 事務局長から開催の挨拶の後に、広報に使用するため委員会の様子を写真撮影することへの協力依頼がなされ、特に異議はなかった。

2 委嘱状の交付

- 机上交付 (略)

3 会長挨拶

- 常務理事から、地域が良くなっていくように力を合わせていきたいと会長に代わり挨拶があった。

4 委員紹介

- 各委員自己紹介 (略)

5 事務局職員紹介

- 事務局職員紹介 (略)

6 議事

(1) 正副委員長の選出

- 千種委員から、熊田委員を委員長へ推薦する発言があり、全会一致で委員長は熊田委員に決定した。委員長から、各委員へ副委員長への推薦の依頼を行ったが特に委員からの推薦がなかったため、委員長から千種委員を副委員長に指名がなされ、千種委員が副委員長に決定した。

(2) 委員会傍聴について

- 委員長から傍聴基準の概略の説明がなされ、委員からは特に意見はなく、提案のとおり決定した。

(3) 議事録の形式及び取扱いについて

- 副委員長から要録で良い旨の意見がなされ、他に反対する委員がなかったため、会議録は要録とすることに決定した。

- 委員長から会議要録の公表については事前のチェックを行ったうえで公表するという意見がなされ、他の委員からは特に意見はなく、事前にチェックしたうえで公表することに決定した。

(4) 推進委員会のスケジュールについて

- 事務局からスケジュール（案）を説明。他の委員からは特に意見はなく、提案のとおり決定した。

(5) コロナ禍における地域福祉活動の情報共有の進め方について

- 委員長 コロナ禍の中での地域の活動の全体について、この委員会で把握しながら進めていきたいので令和2年度の皆さんの活動状況を共有したい。各委員が個人的に感じることも共有しながら本委員会に反映させたい。また、この状況で何を評価するのか、何を応援することが地域の活動の推進につながるのか模索しながら進めていきたい。
- 事務局 コロナ禍における市民社協の事業の実施については、その都度協議し、事業の中止、延期、変更等について決めながら進めてきた。
- 事務局 市民社協では、Zoom（ズーム）というコミュニケーションツールを使って会議を行っている。Zoomの無料使用については利用時間等の制限があるため、有料契約して時間制限がない状態で使用している。今後は、Zoomを使える人をいかに増やしていくかが課題である。
- 委員長 オンラインの運用について、混合（対面とオンラインの混合＝「ハイブリッド」と言う。）の運用は難しい。
- 委員 オンラインやZoomは苦手である。私が活動している母体は赤十字奉仕団であるが、コロナの関係で活動できていない。77歳以上の方への友愛訪問も今年度はできなかった。安否確認の役割ができていない。募金活動も戸別訪問するところと、しないところがあり戸惑いがあった。病院からのエプロンやマスクの作成依頼を受け入れて活動した。これから先は皆で考えていかなければいけないと感じている。
- 委員長 エプロンやマスクについては、継続して作られているか？
- 委員 現在は間に合っているということで、作っていない。
- 委員 福祉の会の状況として、もともと福祉の会は活動の場所が無く、コミュニティセンターを借りている状況である。そのためコミュニティセンターの利用規則に従うことになるため、定例会もほとんど中止、高齢者を招いているサロン活動も中止、子どもの関係事業も中止であり、中止の連絡に忙しく活動らしい活動ができていない。最近2～3人の方から「広報を出してほしい」と要望があった。自身は「コロナ禍で外出できず鬱々暮らしているが、皆がどのような思いで暮らしているのか、普段の日常生活の様子を出し合って、お互いに『もう少しだからがんばりましょう』という励ましの広報を出して欲しい」という要望であった。一人暮らしの高齢者がとても多い。事業が中止なら「すぐ中止する」というより、何か代わりにできないか皆で考えるように提案した。お花を一つ持って行って「お元気ですか？」と一言声をかけるだけで

も違うのではないか。来月は緊急事態宣言が解除になるのではないかと思いつけ、活動が無いに等しい一年でした。

- 委員長 広報について、どのような情報が欲しいという要望か。
- 委員 特に立派なことではなく、「子どもと箱に紙を貼ったりして過ごしているとか、どうしようもない生活をしているとか、何でもないことを書いて配って欲しい。そんな中から、『自分だけじゃないんだ、皆そういった感じなんだ』と共感を呼ぶようなものを配布して欲しい」ということであった。
- 委員長 すごく大事なことである。これまでは雑談の中でされていたことが全てカットされている状況である。このような状況では「公的な情報が必要なのでは？」と思いがちだが、「このあいだ花を見たら奇麗でした。買い物に行ったら安かった。」というような、どうしてもよさそうだが、実はどうしても良くない日常の情報をいかに発信していくかが重要なポイントになっている。普段は後回しにしがちだが、実はそこが大事で、後回しにはしてはいけないと改めて思った。
- 委員 皆様ができることを工夫して、身近な市民の方々へ寄り添っていただいているなど感じた。市の状況としては、交代制勤務や会議室を執務スペースに変えて、密にならないように手探りで取り組んできた。Zoomも慣れてきたところ。ワクチン接種等、全庁を挙げて取り組んでいる。

外出できないことから、高齢者のフレイルも懸念される。8050問題や複合的な課題を抱えている方もいることから、来年度から福祉総合相談窓口を設置する予定である。そこでは、専門職も含めた福祉相談コーディネーターを配置し、必要な機関に繋いでいくということを急ピッチで進めている。情報提供については市報の他、LINE（ライン）も使って広報していく。
- 委員 4月から福祉総合相談窓口ができることについて質問したい。いま、「500円で高齢者安心コール」があり、「高齢者何でも電話相談」もあるが、市報に小さく出ているので見間違いやすい。これでまた相談窓口ができると、市民が一体どこに相談して良いのか分かりにくくなってしまわないかと思う。また、市報に「子ども」という欄があるが、「高齢者」という欄も作って頂いて、そこに高齢者のことを全部書いていただきたい。相談窓口ができるということだが、どこが一番重要なところなのか。友人が「高齢者何でも相談」に電話したときに「ここでは医療関係のことは受けられません」と言われた。「じゃあどこで？」と聞くと「#7119に電話して」と言われた。総合相談については、市民が非常に分かりやすくなるようなシステムにして欲しい。
- 委員 市報に関しては秘書広報課とも話していきたいと思う。福祉総合相談窓口に関しては、「どこに相談したらよいか分らない」ということを無くしたいと考えている。まずは、どこかに相談して頂き、そこから適切どころへ繋いでいく、といったところを大事にしたいと考えている。運用については、福祉総合相談窓口である程度解決できるように職員の研修もしっかりやっていきたいと考えている。
- 委員長 社会福祉法改正の関係でもあり、市で独自にということだと思うが、いろんなところに入った情報が総合相談窓口に集約されるという状況にならないと「総合相談」

にならないと思うので、どのような機能になったのか明確になったら教えていただきたい。

別件であるが、コロナ禍により公的な場所を地域活動で使えなくなっている状況について、市のお考え等はいかがか。

- 委員 市の新型コロナウイルス対策本部会議で議論があったが、緊急事態宣言が解除されることを踏まえて、「宣言前の状況にどのように円滑に戻していくか」ということかと思う。今回は、「午後8時まで」という制限をどのように戻していくかである。換気や定員の制約は残っていくかと思うが、一定の基準はお示しするようになる。
- 委員長 「活動する場所がない」ことは多方面から聞いていることで、「行政として市民活動を支援する」という意味では、環境を整備することが非常に重要になってくることだと思うので、本委員会にも引き続き情報提供していただきたい。
- 委員 ボランティアセンター武蔵野の「運営委員会」や、「お父さんお帰りなさいパーティ実行委員会」の他、毎月行っている「サロン」では、ほとんどZoomベースで行っている。それぞれの会でいろんな発見がある。Zoomのデメリットの話になりがちだが、その前に「ネットを使っているけど生かしているか？」という、生かしていない。ネットであれば、大阪や九州の人にも参加してもらえる。そういうことをしているかという、していない。これまでの会議をネットですしているだけ。それではもったいないと思う。使っている所から生かしていかななくてはいけない。デメリットがあるのだから、メリットを生かしてカバーしていくということ。いろんな人に参加してもらって知見を得る、ということもあると思う。単純なことでは、移動時間は雑談の時間に使える。コミュニティセンターでコンサートや雑談会をやって分かったことがある。コロナ禍で絶対的な情報量は少ないが、集まる人がいる。何かに接触したいと思っている人が多いのだと感じる。これだけZoomが流行っている中で、コミュニティセンターではZoomができない。「Zoomができないから参加できない」ということではなく、「参加できるように場所を用意すれば良い」と思う。Zoomで出来る可能性をもっと広げていく必要がある。その一方で「体温が伝わるようなものをどうやって組み込んでいくか」ということだと思う。逡巡するべき気持ちは何もない。やれるべきことはたくさんあるので、やる気持ちとアイデア次第かと。少し乱暴だがそう思う。
- 委員長 大学では、今年度はオンライン授業のため教壇に立っていない。しかし、欠席者は少なくなった。地域活動で考えると、オンラインになって「遠い人が参加しやすくなった」というお話があったが、参加者が増えたということはないか？
- 委員 私は腰が痛くて、市民社協まで歩くのがしんどいので、市民社協に行くときはタクシーかと思っていたが、幸いにZoomなので支障がなく参加できている。ですからメリットはあるし、まだまだ使い方が足りないのだと思う。やってみると意外な発見もあった。サロンで体操をZoomで行ったが、テレビでも一方的に行っているわけで、何も支障がなかった。先入観で考えない方が良いと思う。それが全てだとは思わないし、「体温が伝わる」「人と会って話をする」意味って何だろうと考えさせられた。逆に人と会わなければいけないことは何なのだろうと考えてみると、感覚的に言うと「体温が伝わる」ということが大事なのだと思う。

- 委員長** オンラインだからダメではなく、オンラインの良さを生かしていく発想や、その中で出来ることを考えていくことが大事である。対面ありきではなく、オンラインも生かしていく発想が大事。また、委員の意見にもあった「インフラ整備」では、公共的空間のインフラ整備と、パソコンを持っていない方へどのようにサポートするか、また、パソコンの使い方をどうサポートしていくかが、オンラインの良さを生かしていくためには大事になってくる。このことは、今後、本委員会の中で議論できればと思う。
- 副委員長** 自宅ではアイパッドを使ってZoomを使っているが、不得意なので娘に聞きながらやっている。何が大事なのか探りながらやっていくことが大事である。御殿山福祉の会では、次の担い手が問題になっている。「福祉の会でやらなければいけないことって何だろう」と考える必要がある。市民社協もいろいろやっているけど、「何のためにやっているのか、それが役に立っているのか、市民が求めていることは何か」を考えなければいけない。コロナ禍でいろいろできなかったことで生じた時間を、そういったことに使っている。
- 委員長** コロナ禍で、必要なものとそうでないものを精査するという話があったが、とても大事なことである。例えば、「要らない」と思っていることがあれば教えていただきたい。
- 副委員長** 「高齢者が求めているものは何？」と問うことがあると思う。市では、在宅介護支援センターもあり、新たに総合相談窓口も設置されるわけだが、その中で8050問題なのか、地域には高齢者だけではなく子どもたちもいる中で、本当に福祉の会に求められていることを考えて見直していくことが必要である。
- 委員長** 何でもやれば良いということではなく、「コロナ禍の影響でやりません」というものは「そこまでのもの」だったと言える。この危機的状況の中で改めて見えてくることもあると思う。そのようなことも、この委員会で検証していきたい。
- また、「担い手」の話があったが、この状況の中でも担い手は要るのである。「コロナ禍だから担い手は要らない」ということはなく、コロナ禍だから後回しではなく、担い手をどう探していくか、次世代の人をどう育成していくか考えていく必要があると思った。
- 委員** コミュニティ協議会の関係で出席している。細かなところは各コミュニティ協議会で決めている部分があるが、開館時間、利用人数の定員等の大枠は市の対策本部会議に従っている状況である。コミュニティ協議会は、人を集める行事が多いため、中止が続いている。昨日、テレビで「裸祭」を見たが、原点回帰というか「これまでと違った形で継続していこう」ということで、従来とはやり方を変えて開催していた。人を集めるのではなく、「いかに人の心と心が繋がっていくような形で、何か変えていけないか」という発想はこれから大事である。
- これまでは、対面で人と人が繋がっているため、「Zoomって何だ」という感じである。しかし、コミ研連に「Zoom活用研究会」ができた。参加しているが、覚えれば便利だと思った。高齢者はなかなか電子媒体には馴染めないが、若い人はほとんど使っている。私も先日いたずらのつもりでLINEを使ってみたら、沢山のメッセージが届いた。若い人は、このように電子媒体で繋がっているのだと感じた。高齢者は得意では

ないため孤立している人が多い。一人でいると徐々に不安になっていくわけである。その辺をどうしていくのがこれからの大きな課題になっていく。新しい生活様式ということでマスクをしているが、新しい生活様式と同時に「新しい福祉のあり方」についても知恵を絞って考えていかないといけないと感じている。

○**委員長** 私も、人を集めることは「手段」であって「目的」ではないと思う。委員の意見にもあったように、「心が繋がる」ために何が必要なのか考えていかないと、「集まらないからやめましょう」という話になってしまう。「繋がること」が大事ということなので、「集まること」ではなく「別の方法で繋がること」を考えていかなければいけない。そのことを、この計画の振り返りの中から発信していくことができるかどうか非常に大事なこと。コミュニティ協議会でも、心が繋がることを探っている感じか？

○**委員** 毎年3月に運営委員と協力員の交流会を開いている。今年は中止にしたが、「お花を差し上げたいという感謝の気持ちも含めて繋がっていくことも大事ではないか」ということで話を進めている。

○**委員長** 委員の発言にあるような「地域での取り組み」も集めていき、この委員会から発進出来たら良いと思う。

○**委員** 私たち民生委員は、「赤ちゃんから高齢者までの市民」への相談支援の役割がある。一番大事なのは、「人と人の繋がり」ということだが、今年度はコロナ禍でそれができないということがネックであった。去年は、今よりも皆が緊張して、外出を控えた。私たちは、高齢者に対応することが多いが、道の途中で会うこともなく、会ったとしても声掛けも遠慮するという状況のため、この一年間「民生委員としてどうなのだろう」と考えていた。定例会は全体会が出来ず書面開催が多かった。情報提供のみで民生委員同士の交流が難しかった。3年に一度実施している「独居高齢者調査」は、「コロナ禍で対面することができない」ために中止になり、市が書面で実施した。この調査は、私たち民生委員が独居の高齢者に会える最大のチャンスだが、これができないことは民生委員として大変なことであった。

また、学校との関わりが持てなくなり、学校公開や運動会、入学式、卒業式などの行事に参加出来なかった。子どもたちとの交流も出来ず残念な一年であった。

新任の民生委員とは、電話はできてもなかなか会うことができず、また、マスクをしているので顔が分からない。民生委員活動のPRもできなくなった。福祉の会やコミュニティ協議会と同じように、民生委員も「担い手がいない」ということでは苦労している。民生委員の連絡網も全員がメールで出来るようになったことでスムーズになった。いずれZoomでも会議ができればと思っている。

○**委員長** 民生児童委員も大変な状況の中で取り組まれている。繋がれない人をどう繋ぐかということも重要だが、オンラインであろうとなかろうと、「繋がりにたくない人」にどのようにアプローチしていくのかは、改めて重要な課題だと思った。是非、民生委員としての今後の取り組みを教えていただきながら、この委員会で検証していければと思う。

(6) 計画の振り返りについて

- 委員長** 残り時間が少ないので、次回への前ふりになるが、資料7について触れていただきたい。
- 事務局** 資料7-1は計画策定の際に議論された内容で、計画書の94頁から抜粋したもの。この委員会で、共通の認識で振り返りをしていくことが計画の推進につながると考えている。資料7-2は、基本目標と重点的な取り組みを一覧にしたもの。評価項目は、議論を進めやすくするために、考えられる項目を沢山盛り込んだ。この資料のとおり評価したいというものではない。
- 委員長** もともと計画の評価が難しい状況にある中で、かつ、コロナ禍という新たな変数が加わり、益々、評価が難しい状況である。まず、「我々が何を大事にして評価を進めていくのか」を固めながら、「これができた、できなかった。」と機械的に進めていくやり方もあるし、「困ったことに対して踏ん張りましょう」とか、「できなかったところへの解決策等の情報提供」も評価のあり方の一つの形になると思う。そういう意味では、この活動計画は事業計画ではないので、「どこまでいったか、いかなかったか」ではなく、「住民活動がどれだけ前を向いてできるかを支える」ということが、個人的には大事だと思っている。しかし、口で言うのは簡単だが、実際にどうするのかはとても難しい。

ちょうど、この3月で「ステップ1」が終わるので、そこまでを何らかの形で評価し、次の「ステップ2」「ステップ3」へ繋いでいきたい。次回の委員会で評価の方向性を決めて、次年度以降に「ステップ1」の評価の手続きを少しずつ進め、次に繋いでいければと思う。この計画の評価について、これだけは伝えておきたいということがあれば、ご意見を。
- 委員** この評価シート(案)で一つ一つやっていくと大変ではないかと思う。状況が分からないので、市民社協のほうである程度の情報を提供していただければと思う。
- 事務局** 取り組みの実施主体が市民社協以外のものは、正直に言って分からないことがある。すべてを調査することは困難なところがあるので、可能な範囲で関係者にインタビューしながらまとめていくという形でいかがか。
- 委員長** おそらく、そのやり方も含めて「検討」ということになると思う。そもそも「アウトプット」「アウトカム」「インパクト」そのもの自体が、この設定で良いかどうかの議論があると思う。この項目は計画の中にあるものではなく、一つのたたき台として出しているものである。委員のご意見としては、個別に見るのではなくて全体の状況が分かるような形で提示し、その状況を踏まえて評価していく手続きが大事だという「状況の出し方」についてご意見を頂いたと思うので、そこを踏まえて次回提案できたら良いと思った。
- 委員** 地域社協は13あるが、温度差が非常にあると思う。そのため、今何が問題点なのかを各地域社協に聞いて欲しい。そして、「地域社協は何をすべきか」を市民社協と一緒に考えて欲しい。地域福祉って何をやるべきか、その原点に戻らないと先に進まないと思う。地域社協それぞれがステップ1、2、3と進めていかなければいけないため、「自分たちの問題点は何なのか」から入って頂ければ。

○委員 実際どのようにされるのか分からない。1年締めかどうかも分からないが、何らかの評価表がベースになる考え方で良いと思う。それを地域社協毎に作って市民社協がまとめるのかどうかという考え方はあると思うが、いずれにしても現場で作上げたものを評価していくしかないというのが一点。それから、コロナという問題もあるが、「コロナがあった」ということよりも「この計画に対してどうだったかを淡々と評価すべき」だと思う。

もう一つは、出来る限り点数化したい。「評価は点数を見たら分かる」という形である。主観的かもしれないが、主観の積み重ねは結構正しい形を現していると思う。極端な話、何点だと思うか全員に聞いて、それぞれ点数が違って良いし、それはあるものを反映していると思うので、単純に言うとしても良いと思う。それだけでは乱暴だから、「何故そう考えるのか」は議論しなければいけないにしても、点数化にはこだわって欲しい。

○委員 よくお医者さん行くと、「最も悪い時を0にして、最も良い時を10とした場合、10段階で体調を書く」ようなものがあるが、そんな評価の形が良い。

○委員長 例えば100点満点のテストで60点ということではなく、プロセスの中でどこまで到達しているかという、点数の見せ方が大事だというご意見か。

○委員 はい。

○委員 私も地域差がすごくあると思う。人口が全く違う。御殿山は約2,300人であるが、10,000人を超えている地域もある。ということは、担い手もその中から探せるわけである。少ない中から探すというのはとても大変である。また、誰が評価するのか、自分たちなのか、私たち推進委員が評価するのか。

○委員長 評価主体については、とても大事である。我々が「どういう根拠で情報を出すか」ということも重要であり、やはり「活動している方が元気が出なくなるような評価はアウト」だと思うので、ひと工夫必要。今、いろいろな状況の中で活動されているが、その中で「そこをもう少しこうすれば、こう良くなるんだ。」といったところを引き出せるような評価のあり方を検討できると良い。時には数値を使ったり、時には文言を使ったりしながらが良いと思う。

また、評価の主体者をどう位置付けるかが非常に大事である。他にご意見があれば事務局までお願いしたい。

7 事務局からの連絡事項

○事務局 ご意見があれば、事務局まで。メール可。

8 次回日程について

3月25日（木）午前10時から 市庁舎 西棟8階 811会議室

（午後0時5分 閉会）